

主 題：新しくされた者の責任と希望①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 3章1節－4節

聖書をお持ちの方はきょうのテキストであるコロサイ3：1－4をお開きください。パウロがここに記した神の知恵と一緒に見ていきましょう。

コロサイ3：1－4

:1 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。

:2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。

:3 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。

:4 私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

○イントロ：コロサイの手紙の背景と目的

さて、きょうの内容に入る前に、コロサイの手紙がどのような背景で、またどのような目的で記されたのかを思い出してください。ローマに捕らえられ、獄中にあったパウロを彼の同労者であったエパfrasという人物が訪ねてきました。彼がパウロを訪ねた目的は、コロサイのクリスチャンたちがどのような歩みをしているかの現状報告をするためでした。パウロは一度としてこのコロサイの人たちに実際に会ったことはありませんでしたが、彼からの報告で彼らが主に忠実に歩んでいることを聞き、心から喜び、神に感謝していました。

しかし、エパfrasが持ってきた報告は喜ばしいものだけではありませんでした。同時にこの人々の中に誤った教えが入り込み、彼らはその影響を受けていたのを知ったのです。一体どんな誤った教えが彼らを惑わしていたのでしょうか。これに関してはさまざまな考えがあります。2章の中にはパウロが割礼や食べ物、安息日について人々の考えを正している様子が見取れます。ユダヤ人的慣習に関連して、律法主義的な教えをする人たちがいたようです。またある人は、禁欲主義的考えが横行していたのではないかと考えていたりもします。確かにいろいろなことが考えられます。しかし、彼らが直面していた最も根本的な問題は、キリストはすべてにおいて十分な存在ではないという考えでした。にせ教師たちはことば巧みにコロサイの人々を正しい福音、聖書の教えるキリストの姿から離れさせようとしていたのです。キリストは真の神ではない。救いはキリストだけでは十分ではなく、割礼など私たちの行いも必要です。このように誤った教えはキリストの人格と神性を否定し、あたかもキリストが救いにおいて、また信仰の歩みにおいて不十分な存在であるかのように、人々を混乱させていたのです。だからこそパウロはそういった間違いに対して、キリストこそがこの世界を創造し支配されている真の神であり、すべてにおいて十分な存在なのだとして繰り返しコロサイの中で教えたのです。

コロサイ2：9－10の中で、パウロは「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。」とはっきりと言っています。キリストこそが最高のお方であり、コロサイのクリスチャンにはこの方以外に必要とする者はないこと、この方だけが救いにおいても信仰生活においても十分なものであると改めて明白にするために、パウロはこの手紙を人々に書き送ったのです。

☆新しくされた者の責任と希望

今朝、私たちがこの手紙から考えていきたいことは、タイトルにもあるように「新しくされた者の責任と希望」についてです。私たちがそのことを考えていくに当たって、まずひとりひとり自分自身に問いかけてほしい質問があります。その質問とは、「あなたは本当にキリストだけが自分にとって十分なものだと考えているでしょうか？またキリストが十分だと考えるその考えにふさわしい生き方を今しているでしょうか？」ということです。もちろんこのように問えば、ここにいる多くの人は「はい、もちろんです」と答えられると思います。でも問題は実際にどうかということです。少し自分の生活を振り返ってみてください。普段私たちはキリストさえいれば、キリストがいれば十分だ、私は平安でいられますと言っているかもしれませんが。では今の世界のように、私たちが想像もしていなかったような病気や災害が起きたり、私たちの手には負えないような問題が家庭や仕事で起こったりするならば、そんな中であって、あなたはどのように振る舞っているのでしょうか？キリストにある平安で十分、だけど、私はこれも必要だ、そのようになっていないのでしょうか？また、キリストがいれば十分です、私は喜びと満足にいつも満たされていますと普段言っているかもしれませんが。では、あなたから希望を奪うよう

な、苦しみや悲しみが降りかかってきた時にどのように振る舞っているのでしょうか？キリストで十分、だけど今回は例外だから、今回のこの苦しみにはどうしてもあれが必要だ、あれをしなければいけないとなっていないのでしょうか？キリストこそが自分にとって十分だと言いながら、もし私たちがキリスト以外に何かそれにかわるものを求めているのであれば、私たちが何と言おうとも、その歩みがこう証明しているのです。キリストは私にとって十分な存在ではないと。

私たちにはキリストがいれば十分です、キリストさえ持っていれば私たちは必要なものをすべて持っています。ではそんなキリストを持っている者にふさわしい歩みとはどのようなもののでしょうか？この方に満たされた生き方とはどのように生きることを言うのでしょうか。これから私たちはキリストを手にし、キリストによって変えられた者だけが歩む新しい人生の姿を見ていきます。新しく変えられた者だけが持つ責任と希望、それは一体どのようなものなのでしょうか？どうかこのみことばを通して、私たちがキリストにあって、どのような歩みをするのが可能になったのかをもう一度考える機会になるだけでなく、この真理がひとりひとりの日々の歩みの励ましとなり、そして私たちの持っているキリストがいかに私たちにとって十分な、私たちにとってすばらしい存在であるのかを確信し、改めて感謝する機会になることを心から祈っています。

A. 新しくされた者の二つの責任 3 : 1 - 2

まず新しくされた者の二つの責任について、コロサイ 3 : 1 - 2 の中に見ることができます。

1. 「上にあるものを求める」 1 節

もう一度 1 節を見てください。「こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。」と記されています。キリストによって新しく変えられた者の一つ目の責任は「上にあるものを求め」ということです。救い主にその罪を赦され新しい命を与えられた者は「上にあるものを求め」る、そんな新しい生き方をするようになったのだとパウロは教えました。ここで使われている「求め」ということばは「必死に努力をして目標を達成しようとする」とか「必死に願いを実現しようとする」という意味があります。何か目標に向かって必死に努力をしてその目標を達成しようとするという意味を持っています。またこのことばはここで現在形として用いられています。つまりこの「求め」という行為は一度きりのものではなく、継続して行うべきこと、自身の生活の中で日常的に求め続けることだということです。新しく変えられた者、この人物はたった一度きり求めるだけではなくて、日曜日だけ求めるのではなくて、毎日の生活の中で必死になって常に「上にあるものを求め」続けるのだとパウロは言いました。

1) 上にあるもの

ではそもそもこの「上にあるもの」は一体何を指しているのでしょうか？パウロは一体ここで何を求めるようにと具体的に教えたのでしょうか？その答えを私たちはパウロの続きのことばに見ることができます。続いてパウロは「上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。」と述べました。パウロの命じた「上にあるものを求め」る、これは救い主イエス・キリストを求めるということです。より具体的に言うならば、キリストの権威に服従し、この方に似た者へと変わることを求め続けるということです。新しく変えられた者は何よりも神様の主権に身を委ねて神様の前に正しい者へと変わり続けていくことを求めるのだとみことばは教えます。

ここで見落としてほしくないパウロの大切なことばがあります。パウロは単に「上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが」おられますとは言わずに、「上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられ」と言いました。この描写についてヘブルの著者もヘブル 1 : 3 で「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」と述べています。キリストが神の「右の座」に座っている、着かれています。一体これの何が大切なのかというと、それはこの事実がキリストが救い主としての働きをすべて成し遂げられたことを意味するからです。

旧約の時代、神様に選ばれた大祭司は毎年毎年民の犯した罪のためにいけにえを捧げ続けていました。しかし、大祭司が幾ら捧げても、その捧げ物が人々の罪を完全に拭い去ることは決してできなかったのです。人々にはこの罪を完全に拭い去るような何かが必要でした。そんな中、私たちの救い主イエス・キリストは神の小羊としてただ一度自分の身を捧げ十字架に架かることで完全な罪の赦しを備えてくださったのです。あのゴルゴダの丘で「完了した。」（ヨハネ 19 : 30）と叫ばれたその時、まさに救いのみわざは達成され、罪の聖めが成し遂げられたのです。そして死の力に勝利した主は三日目によみがえり、天に凱旋されて神の「右の座」にすべて終えて着かれたのです。神の「右の座」、このことば自体はこの世界において最も最高の権威、そのものが持つ力、主権を表すことばです。要するに救いを完成されたイエス・キリストは、天において最も位の高い地位に着かれ、そして今もこの世のすべてを支配されているお方を私たちは求めるのだとパウロは言ったのです。主の主、王の王として君臨さ

れているこのキリストの目的、キリストの計画、その力、その支配に私たちの身をすべて委ねて生きる、そんな責任が私たちにはあるのだと教えているのです。

イエス様はマタイの中で、同じようなことをこう言われています。私たちもよく知っているマタイ 6 : 31 - 33 です。「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」と。このみことばは、生活の中で必要な食べ物や衣類を私たちが求めてはいけなさと教えたわけではありません。ここでイエス様が言わんとしたことは、すべてを支配している天の父は、あなたが今どんな状況に置かれていて、どんなものを必要としているのかをもう知っている。そしてこのお方は別にだれの指図を受けることもなく、必要な時に、必要なタイミングであなたに必要なものを与えてくださるのです。だからこそ私たちは地上のことで心配したり心を揺るがすのではなくて、主権者である方にすべてを委ねて、この方に喜ばれる者になり続けることこそが私たちにとって何よりも大切なのだと教えたのです。新しく生まれた者はこの世のものより天のものを求めるのです。新しく生まれた者は物質的なものより霊的なものを求めます。新しく生まれた者は一時的に価値のあるものよりも永遠に価値のあるものを求めるのです。新しく生まれた者は自分の願いよりも神のみこころを求めるのです。新しく生まれた者とは自分を喜ばせることよりも主を喜ばせることを求める責任があるとパウロは一つ目の責任として教えました。

2. 天にあるものを求めなさい 2節

続けて、パウロは二つ目の責任を2節に「あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」と記しました。キリストによって新しく変えられた者が持つ二つ目の責任は「天にあるものを思う」ということです。言い換えれば地上のものにとらわれないということです。この「思いなさい」ということばは、「何かに心を定める」、「思いを置く」、「心に決める」という意味を持っています。ですから単に頭の中で、知的に考えるだけでなく、意思を持って何かに心を定めることを表しています。新しく変えられた者は「地上のもの」ではなく、「天にあるもの」に意思を持って心を定め続けて生きるのだと教えます。

ここで勘違いしてほしくないのは、パウロは地上のことを思うなと命じましたが、これはそれぞれが地上で与えられている責任をないがしろにしてよいと勧めたのではないということです。パウロは決して普段の生活を好き勝手にしていい、地上でのことを軽視してこの地上での責任をすべて放棄したらよいと教えたではありません。私たちは日々の生活にあって、神様からそれぞれたくさんの恵みを受け、たくさんの責任が与えられています。家族や仕事、友人、また学校や教会、時間であったり、お金であったり、神が与えたそういったものに対する私たちの責任はひとつひとつに忠実であることです。また、私たちはこの地上でたくさんのものを楽しむこともできます。自然やスポーツ、食べ物を楽しんだり、音楽や趣味を喜びとしたり、いろいろなことを通して私たちは神様に感謝を捧げることもできるのです。ですからパウロはそういったものを一切楽しんではいけな、そういったものをすべて捨て去らなければいけないと言ったではありません。

では、「地上のものを思わず、天にあるものを思う」というのはどういうことを意味しているのでしょうか。このことを考える上でのパウロの命令のポイントは、あなたの心が一体何に一番支配されているのかを考えなさいということです。私たちの心が一体何に焦点を置いているのかをコロサイの人も私たちも問われているのです。これはとても大切なことです。なぜなら私たちもよく知っているとおり、人の思いや考えというのはその人の行動に大きな影響を及ぼします。イライラしている時はきつい口調になってしまったり、焦って物事がうまく行っていない時は平安を失ったり、自分の考えを一番にしている時、自分の考えこそが正しいと自分を正当化する時、私たちは相手の意見を受け入れたり、間違った相手を赦すことができなかつたりします。また自分の趣味ややりたいことを優先して、自分の心が自分のやりたいことで支配されている時、本当に必要な神様との時間を取れなかつたりします。私たちが心の中で考えていることはいろいろな形で、いろいろな状況でもって行動として表に出てきます。だからこそ私たちの心に向けるべき方向に向け続けること、正しいものに心を置き続けることが大切なのだと聖書は教えます。ルカ 12 : 34 でも「あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるからです。」と教えています。

ですから、きょう帰ってからでもいいので、時間を取って今の自分の心を吟味してみてください。幾つかの質問を自分の心に問いかけてみてください。

今、あなたの心はどこを向いているのでしょうか？

今あなたは何を一番大切にしているのでしょうか？

何に価値を置いて日々を歩んでいるのでしょうか？

一日の生活の中で一体何が一番犠牲を割いているのでしょうか？

一体何に心をとらわれているのでしょうか？

また、今のあなたの生活の中で何を取り上げられたら、何がなかったら困るのでしょうか？

もしこれらに対するあなたの答えがキリスト以外のものであるならば、神様よりも重要なものがあるのであれば、明白なのはあなたの心は天のものではなく地上のものを思っているということです。パウロは新しく生まれた者として、天にあるものに心を定め続けて生きていきなさいと命令しました。その責任が私たちひとりひとりにあるのだと聖書は教えたのです。

3. 責任を果たす力の源

さて、ここまで新しくされた者の責任について見てきました。皆さんはこのような責任にふさわしい歩みをしているのでしょうか？地上のものを思わず、いつも天に心を向けて歩んでいるのでしょうか？イエス・キリストに似た者になりたいと日々歩んでいるのでしょうか？ある人はこう考えたかもしれません。そんなふうに進んでいくことは自分には到底不可能だと。またある人は確かに私はキリストに似た者になっていきたいし、喜ばれる者として歩んでいきたいけれども、実際はすごく難しい。もしそう感じたのであれば、もう一度パウロのことばによく耳を傾けてください。彼は1節の中で命令を記す前にこう言っています。「こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。」と。残念ながらこの日本語訳はここでパウロが本当に言わんとしたことをうまく訳せていません。彼のことばを原語に忠実に訳すとすれば、「こういうわけであなたがたはキリストとともによみがえらされたのだから」と言ったのです。パウロは「もしよみがえったのなら」ではなく、あなたがたはキリストとともによみがえったのだからと、「もし」ではなく「だから」と言ったのです。兄弟姉妹の皆さん、私たちが覚えなければならないのは、このような責任に従うことができること、このような命令に従うことができるのは、何も私たちのうちに知恵や力があるからではありません。

ではその力は一体どこから来るのかというと、その力はキリストのうちにがあると教えます。そしてこのキリストとともに私たちが死からよみがえり、このキリストと一つとされた今だからこそ、私たちは天にあるものを求めて生きる、そのような生き方をすることが可能なのです。パウロはガラテヤ2：20の中で、自分の状態をこのように表しています。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」（新改訳第3版）と。パウロも私たちもかつては霊的に死んでいた者でした。エペソ2：1にも「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、」と記されています。だから罪に死んでいた以前の私たちは神のみことばに従うことなど不可能だったのです。いやもっと言えば、神の救いのメッセージを受け入れたいとも思わず、ただ神に逆らい、御怒りを自分の上に積み上げる、そんな罪のさばきを待つだけの身だったのです。しかし、あわれみ深い神はそんなパウロや私たちをご自身の愛と恵みによって救ってくださった。そしてその結果、罪赦されただけでなく、イエス・キリストとともに私たちが十字架につけられたことで、かつての古い自分が死んだのです。私たちの古い生き方はイエス・キリストとともに十字架につけられ、そして完全に終わりを迎えた。キリストにあって一度私たちは死に、そして新しいのちがキリストによって与えられ、新しい生き方をする者へと私たちは一新されたのだと。

キリストによって新しいのちを与えられている今だからこそ、キリストの主権に服従し、このお方に似た者になっていくことが私たちには可能なのです。いや、もっと言えば、キリストとともに私たちがかつての生き方と決別したからこそ、新しい生活を始めたからこそ、私たちはかつての生き方と同じようなことをもう繰り返したくないと。今私が新しいのちを与えているように、新しい生活をしているように、キリストだけを求めて生きたいと、そのような者になつたのです。私たちに必要なものはキリストでした。そしてそのキリストがあなたにも与えられたと。だからあなたにとって必要なものはもうない、あなたは必要なものはすべて持っているのだと。キリストこそが私たちにとってのすべてであり、十分な存在なのです。もちろんキリストにある者のうちから全く罪がなくなったということではありません。だからこそ私たちは日々の生活の中であって罪との葛藤を経験するのです。しかし、新しく変えられた者には救われる以前は持っていなかった聖さやキリストに似た者になりたくないと求める願いが与えられているのです。かつての生き方から変えられ新しい者になった人物は聖になりたい、キリストに似た者になりたいという思いを神が与えてくださり、心に持っているのです。

聖書の教える救いというのは神様の命令を私たちが守るから、神様が喜んで私たちのことを救ってくださったわけではありません。どうしようもなかった私たちを神の力が根底からすべて変えたのです。それゆえに私たちのうちからこの神への愛と神に対する感謝の現れゆえにこのお方の命令を守りたいと、もっとキリストに喜ばれる者になりたいと、そのような思いがわき上がってくるのです。ですからもし

皆さんのうちにそのような聖さを求める思いがないのであれば、もしあなたのうちに救われる以前、かつて追い求めていたものを今なお追い求めているのであれば、自身の信仰が本物かどうかをよく吟味しなければいけません。また今まで一度もこのすばらしいあなたを造りかえることのできる神の救いの力を経験したことがないのであれば、きょう罪を悔い改めてこのイエス・キリストを自分の救い主として受け入れてくださることを心からお勧めします。この方は私たちには一切何もできなかったその罪の力をたったひとりで打ち破り、そして私たちに何よりも必要だった罪の贖いを、罪の赦しを与えてくださったのです。この方だけに、この方にのみあなたを救う力があるのです。

そして今罪との葛藤を経験しながらも、新しくされた者として忠実に歩もうとされている皆さん、続けてその歩みをすることです。天にあるもの——私たちが本当に喜ばせ、私たちに本当に満足を与えるものに心を定めて、神の前に価値あるものにいつも目を向けて歩み続けることです。私たちの力ではありません。そのことを可能にしてくれるイエス・キリストがその力を与えてくださるので、だからこそ私たちは天にあるものを思い続けて心を定めてきょうを生きていく、その責任が私たちには与えられているのです。

B. 新しくされた者の二つの希望 3-4節

次に、新しくされた者の希望について見ていきましょう。二つの希望が3-4節に記されています。

1. 私たちのいのちはキリストとともに隠されている 3節

3節に「あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。」とあります。キリストによって新しく変えられた者が持つ一つ目の希望は私たちの命が神のうちに隠されているということです。パウロはキリストとともに新しく生まれ変わった生き方をしている者のいのちが神のうちに隠されているのだと言いました。

この「隠されて」いるということばは実際どういう意味なのでしょう？大きく分けると二つのことがこのことに関して言えます。

1) 新しくされた者のいのちは神を知らない者には理解できない

一つ目は新しくされた者を神を知らない者は理解できないということです。もちろんこの理解できないということは私たちが何か自分の正体をこの世の人から隠してクリスチャンであることを内緒にして生きているから理解できないということではありません。もっと言えば聖書は明白にこの世で光として、また塩として神をあかしするあかし人として生きていくことを私たちに求めています。私たちはことばだけでなく、日々の生活での歩みを通して私たちの周りにいるまだキリストのすばらしさを知らない者に大胆にあかしをしていく責任があるのです。

ではここで言う「隠されて」いるということはどういうことかということ、それは神を知らない者はキリストの価値を理解できない。だからこそそこにのみ価値を置いて歩む私たちの生き方を理解することができないということです。パウロはIコリント2:14で「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」と言っています。明白なのは「生まれながらの人間」は神の御霊を持っていないゆえに、神のことを理解できないということです。キリストに価値を置く生き方がすばらしいとは思わず、この人たちにとっては愚かだと思ふのです。皆さんも経験があると思います。自分がどんな時もキリストを一番にしようとする姿を見せる時に、物事を判断する時に自分のしたいことではなくて、神様のみこころを求めようとする生き方を人々が見る時に、なぜ自分のしたいことをせずに、そのようなことをするのですかとあなたの行動に疑問を抱いた人があなたのもとを訪ねてきたことがあるかもしれません。また恐らく救われる以前の皆さんも、そのような思いを抱いたことがあるのではないのでしょうか。例えば教会に来た時にそこにいる人がいつも喜んでいて、どうしてあの人は喜ぶことができるのだろう、どうしてあの人はあんなにも犠牲的に仕えているのだろう、あの人の愛は一体どこから来ているのだろうと。

キリストがうちに住んでいない者、御霊を持っていない者というのは、このキリストのすばらしさを理解することができないのです。そして、このキリストと一つにされている私たちが一体何者なのかを、実際に本質を理解することができないのです。ですから私たちが主のうちに忠実に歩めば歩むほど、この世は私たちを異なった存在と見るようになります。そしてそのことはいいことだと、この後出てきます。このように「隠されて」いるという一つ目の意味は、御霊を持っていない人にはキリストのうちに隠されている私たちの本質を理解することはできないということです。

2) 新しくされた者は主のうちに守られている

二つ目に、「隠されて」いるということばは、新しくされた者は主のうちに守られているということも意味しています。聖書を見ればいろいろなところで、例えばダビデが主の御翼の陰にかくまわれていたりする姿を見ることができます。信仰者が神に「隠されて」いる、かくまわれている、守られている

姿を私たちは見ることができます。

私たちはどのような時に不安や心を取り乱したりするのでしょうか？仕事で問題が起きた時でしょうか？人間関係で問題が起きた時でしょうか？病気になった時でしょうか？将来が見えなくなった時でしょうか？悲しみや絶望で暗闇にぼつんと一人取り残されたかのように感じる時でしょうか？私たちはいろいろなことで不安を抱きます。でもみことばが教えることはたとえどんな状況に置かれていたとしても、あなたがどんな状況にあったとしても、私たちはもう一人ではないのだということです。いつも私たちのうちにキリストがともにいてくださる。あなたが孤独を感じる時でも、あなたのうちにはキリストがいてくださる。イエス様はヨハネ10：28で「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」と言いました。この約束された方は決して私たちを見捨てることなく、私たちの周りの者も決して私たちをこのキリストから引き離すことはできないのだと。そして多くの皆さんの好きな箇所の一つであろうローマ8：29-31でもパウロは「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」と。この世が始まるよりも前に、私たちが生まれるよりもはるか前に私たちを救いへと導くことを定め、そしてその計画にのっとって私たちを召し、義と認め、栄光を与えてくださる、そのようなことを決められた主権者が私たちにとっての味方としていてくださると。喜び、義、愛、寛容、あわれみ、慰めや力や知恵、そういったものの源であり、またすべての支配と権威の頭であるそんなキリストがあなときょうをともにしてくださいと。いつも私たちとともにいてくださると。

こんな神様だからこそモーセもアブラハムもダビデやエリヤやヨブやパウロや、またペテロも、そして教会の歴史の中において多く殉教していった者もみんな、どんな状況に置かれていても希望を見出すことができたのです。私たちの目には困難に思える状況にあっても、いつでも喜びを持って、平安を持って、希望を見出して歩むことができたのです。一体どうしてか——。それはあの人たちのうちに何か力があつたわけではありません。その人たちが強かったからでもありません。その人たちのうちにおられるキリストがその人たちを強めたのだと。私たちのうちにおられるキリストこそが私たちに喜びを与え、慰めを与え、平安を与え、きょうを歩むことを助けてくださる。こんな方が私たちをいつも守ってくださるからこそ私たちはいつも安全なのだ、いつも希望や安心を持って歩むことができるのだと、そんな希望を私たちは今持っているのです。

2. キリストとともに栄光にあずかる 4節

そして最後に、私たちの持つ希望についてパウロは4節でこう言っています。「私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。」と記されています。キリストによって新しく変えられた者が持つ二つ目の希望は、私たちはキリストが現れる時、キリストとともに栄光にあずかるのだということです。先ほど私たちは神のうちに隠されているということを見ました。私たちの価値観をこの世の人たちは理解できないと。でもこのことがずっと続くわけではありません。一度目は救い主として来られたにもかかわらず、この世に受け入れられず、理解されなかったお方が、今度は王として栄光を帯びてこの地上に帰って来られる。その時に、地上の者はイエス・キリストが一体どのようなお方なのかということを実に理解して、この方の前にひざまずくのです。隠されていた私たちもキリストが現れるその時に本当の正体が、本当の価値がそこで明らかにされると。

パウロはここでも「キリストが現われる」ならとは言いませんでした。「私たちのいのちであるキリストが現われる」と言ったのです。いつこの方が帰って来られるのかは私たちにはわかりません。しかし、必ず帰って来られる、必ずそんな日がこの先やって来るのだとパウロは確信していたのです。そして、今私たちも同じ確信を持って歩むことができる。Iヨハネ3：2では「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」と言っています。今は確かに私たちは罪の中でもがき苦しんでいるかもしれませんが。確かに今私たちは悲しみの中にいるかもしれませんが。でもいずれ私たちはキリストを、ありのままの姿を見るのです。このクリスチャンの持っている希望というのはこの世が考えるような、こうなればいいのとか、そのような不確定なものではありません。必ずキリストは帰って来られ、必ず私たちはキリストとお会いするのだ、決して変わることはない確信を私たちは持つことができると教えます。

そして、キリストが現れる時に、私たちの涙はぬぐわれ、重荷は取り除かれ、痛みは取り去られ私たちがこの地上で払った犠牲、そのすべてにおいて神は報いを与えてくださると。主の約束は必ず最後に

は成し遂げられるのであって、私たちがこの方に確信を置いている以上、私たちはこんなすばらしい希望を持ってきょうを歩むことができるのです。

○まとめ

この朝は新しくされた者が持つ責任と希望についてパウロのことばから学んできました。F・M・ブルースという聖書学者は今の私たちの状態を次のように描写しています。「私たちはこの世という今にも消えてしまいそうな沈みゆく船から逃れる漂流者です。私たちの希望は永遠に価値あるもの、ご自分のものをよくしてくださるといふ神の永遠の約束の上に固く立っているのです。」と。私たちひとりひとりの責任は、消えていくこの地上のものではなく永遠に価値ある天のものに目を向けて、きょうを歩んでいくことです。私たちと同じ責任と同じ希望を持っていたパウロが一体どのように歩んだのか、皆さん覚えていると思います。ピリピ3：13-14の中にこう彼は記しました。「兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕えたなどと考えるてはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」と。パウロは希望を持ってキリストにおいて栄冠を得るために最後の最後まで自分の責任を果たして、忠実に走り切りました。

問題は私たちひとりひとりがどうなのかということです。あなたは日々キリストに似た者になり続けていきたいという思いを持って今歩んでいるのでしょうか？先にも見たように、天のものを求めて生きるという生き方は私たちが好きな時にだけしていいものではありません。私たちは天のものに心定め続けて日々を生きていくのです。私たちはそのような者としてきょうを歩んでいるのでしょうか？私たちが模範とするイエス・キリスト、このお方に私たちはきょう似た者になっているのでしょうか？イエス様が愛したように私たちは人を愛し、イエス様が忍耐を持って私たちに接して下さったように、同じように忍耐を持って人に接し、イエス様が喜んでいたように私たちは日々の生活にあって喜び、イエス様が平安を持って歩まれたと同じ平安を持って私たちが歩む。私たちはそのようなキリストに似た者へときょう変えられているのでしょうか？変わり続けているのでしょうか？

私たちが最も陥りやすいわなは、自分にはできないと考えてしまうことであったり、またほかの人を指して、自分は確かにやっていきたいけれども、あの人もやらなければいけないでしょうか、自分よりもほかの人に目を向けていたり。また自分の置かれている状況が自分の望むものでないゆえに、神様、私はキリストに似た者になりたいたいですけれども、この状況が改善されたら私はそのことをしめすといった言い訳をよくしてしまうことがあります。パウロがそんな私たちやコロサイの人に与えたメッセージは、あなたにはキリストが与えられていると、あなたにはもう必要なものはすべて与えられている、これ以上何を望むのか、キリストがあなたのうちにおいて、あなたとともに歩んでくださるといふことです。そんな希望とそんな特権を私たちはきょう持っているのです。ですからもし、私たちが平安を抱くことが困難だと考える場面に直面すれば、その時にこそキリストにのみ見出すことのできる平安を学ぶ機会だと考えることです。もし私たちが何かにおいて喜びを失ってしまったのであれば、そのときにこそキリストだけに見出すことのできる喜びを見出す機会だと感謝することです。私たちに必要なのはキリストだと。そしてそのキリストが今皆さんには与えられているのだと。だからこそあなたにとって必要なものは十分備えられているのだと、神は聖書を通して私たちに教えてくれているのです。

来週私たちはこの続きで、より具体的に、上のものを求める生き方は私たちの日常生活において、どのような形で反映されるのかを見ていきます。きょう私たちが学んだことを、今週それぞれの場において、私たちに与えられている責任を覚えて、そのことに忠実に希望を抱きながら、キリストだけに自分の力を見出して、感謝を持ってぜひ歩んで行きましょう。